

—JNMS のページ—

**Journal of Nippon Medical School**

Vol. 73, No. 5 (2006 年 10 月発行)

**Summary**

Journal of Nippon Medical School に掲載しました Original 論文の英文「Abstract」を日本医科大学医学会雑誌に和文「Summary」として著者自身が簡潔にまとめたものです。

**Effect of First-trimester Ultrasound Examination for Chromosomal Aberrations in Women Undergoing Amniocentesis**

(J Nippon Med Sch 2006; 73: 271-276)

**羊水染色体検査に対する妊娠初期超音波検査の影響**三宅秀彦<sup>1</sup> 中井章人<sup>1</sup> 島田 隆<sup>2</sup> 竹下俊行<sup>1</sup><sup>1</sup>日本医科大学大学院医学研究科女性生殖発達病態学<sup>2</sup>日本医科大学大学院医学研究科分子遺伝医学

目的：本研究の目的は、羊水染色体検査症例に対する妊娠初期超音波検査の有用性の評価である。

対象および方法：1991 年から 2005 年の間で日本医科大学多摩永山病院における羊水染色体分析症例を対象として、超音波検査所見を含めた羊水染色体検査の適応と羊水検査で診断された染色体異常症例について検討を行った。

結果：1,054 人の羊水染色体検査が行われ、1,063 検体が分析された。染色体異常の検出率は 3.3% (35/1,063) であり、観察期間中はほぼ一定であった。超音波所見を適応とした症例の数は、初期の 5 年間では 5 件 (1.1%) であったが、後期の 5 年間では 46 件 (19.4%) と有意に増加した。対照的に、羊水検査数は観察期間を通して減少傾向を示した。

結論：妊娠初期の超音波検査は、羊水染色体検査に影響を与えていると考えられた。妊娠初期の超音波検査は、侵襲的な染色体検査の減少と関係している可能性がある。

**Blood Glucose-lowering Activity of Colestimide in Patients with Type 2 Diabetes and Hypercholesterolemia: A Case-control Study Comparing Colestimide with Acarbose**

(J Nippon Med Sch 2006; 73: 277-284)

**2 型糖尿病に高脂血症を有する患者におけるコレステミドの血糖低下効果について：**

**アカルボースとの比較検討成績**鈴木達也<sup>1,2</sup> 大庭建三<sup>1,2</sup> 二見章子<sup>1,2</sup> 鈴木一成<sup>1,2</sup>  
大内基司<sup>1,2</sup> 猪狩吉雅<sup>1,2</sup> 松村典昭<sup>1,2</sup> 渡邊健太郎<sup>1,2</sup>  
木川好章<sup>1,2</sup> 中野博司<sup>1,2</sup><sup>1</sup>日本医科大学大学院医学研究科器官機能病態内科学<sup>2</sup>日本医科大学付属病院老人科

背景：2 型糖尿病患者において陰イオン交換樹脂製剤による血糖低下が報告されている。

目的：2 型糖尿病に高脂血症を有する患者において、 $\alpha$  グルコシダーゼ阻害薬と比較し、陰イオン交換樹脂製剤であるコレステミドの血糖低下の有用性を検討する。

対象：33 名の 2 型糖尿病に高脂血症を有する患者をコレステミド群 (17 名) およびアカルボース群 (16 名) の 2 群に可能な限り無作為に振り分けた。両群とも服薬後 10 ポイントで血糖値および血清脂質を測定し、J-index と M 値を算出した。

結果：コレステミド群では、朝食後 2 時間の血糖値が  $216.9 \pm 37.2$  mg/dl から  $191.1 \pm 40.9$  mg/dl ( $p = 0.008$ )、J-index が  $42.6 \pm 14.5$  から  $32.6 \pm 9.8$  ( $p < 0.001$ )、さらに M 値が  $23.1 \pm 12.1$  to  $14.6 \pm 7.1$  ( $p < 0.001$ ) とそれぞれ有意に低下した。

結論：2 型糖尿病に高脂血症を有する患者において、コレステミドはアカルボースとほぼ同様な血糖低下効果が認められた。

## Journal of Nippon Medical School

Vol. 73, No. 6 (2006年12月発行)

### Summary

Journal of Nippon Medical Schoolに掲載しましたOriginal論文の英文「Abstract」を日本医科大学医学会雑誌に和文「Summary」として著者自身が簡潔にまとめたものです。

### Cyclo-oxygenase-2 Over-expression Is Associated with Human Esophageal Squamous Cell Carcinoma

(J Nippon Med Sch 2006; 73: 308-313)

ヒト食道発癌早期における Cyclo-oxygenase (COX)-2 の発現

宮下正夫<sup>1</sup> 牧野浩司<sup>1</sup> 勝田美和子<sup>1</sup> 野村 務<sup>1</sup>  
進士誠一<sup>1</sup> 柏原 元<sup>1</sup> 高橋 健<sup>1</sup> 工藤光洋<sup>2</sup>  
石渡俊行<sup>2</sup> 内藤善哉<sup>2</sup> 田尻 孝<sup>1</sup>

<sup>1</sup>日本医科大学外科学 (消化器・一般・乳腺・移植部門)

<sup>2</sup>日本医科大学病理学第2

Cyclo-oxygenase (COX)-2は正常組織では通常発現がみられず、炎症や大腸、膀胱、皮膚などの発癌過程で著明に発現するといわれ、食道では扁平上皮癌、腺癌でも発現することが知られている。今回、48症例の食道扁平上皮癌手術標本におけるCOX-2の免疫組織学的発現と臨床病理学的因子とについて検討を行った。COX-2の発現は癌の浸潤程度が粘膜下層(T1b)で76.4%、固有筋層(T2)で57.1%、外膜から襲臓器侵潤(T3~4)で83.3%と高頻度であったが、一方、粘膜癌でも33.3%にみとめられた。また、リンパ転移陽性例では82.3%、陰性例では54.8%であったが、進行度による差はみられず、術後3年生存率にも有意差は認めなかった。以上、COX-2は食道発癌の早い段階から発現し、さらにまた、腫瘍の増殖にも密接に関係するものと考えられた。

## Analysis of Risk Factors for Postpneumonectomy Bronchopleural Fistulas in Patients with Lung Cancer

(J Nippon Med Sch 2006; 73: 314-319)

肺癌患者における肺全摘出後気管支断端瘻の危険因子の解析

原口秀司<sup>1,2</sup> 小泉 潔<sup>2</sup> 日置正文<sup>1</sup> 平田知己<sup>2</sup>  
 平井恭二<sup>2</sup> 三上 巖<sup>2</sup> 窪倉浩俊<sup>2</sup> 榎本 豊<sup>2</sup>  
 木下裕康<sup>1,2</sup> 清水一雄<sup>2</sup>

<sup>1</sup>日本医科大学武蔵小杉病院外科・心臓血管外科

<sup>2</sup>日本医科大学外科学（内分泌・心臓血管・呼吸器部門）

気管支形成を伴わない肺切除術（全胸膜肺切除術を含む）142例を対象として、気管支断端瘻（以下BPF）の危険因子を検討した。BPFは12例（8.5%）に発症し、右肺全摘出術8例（22.9%）、左肺全摘出術4例（5.1%）であった。男性11例、女性1例に発症し、平均年齢は57.8歳、術後平均第16.5病日（第7～45病日）に発症した。組織型は扁平上皮癌9例、腺癌2例、その他1例で、病理病期は、I期1例、III期9例、IV期2例であった。

気管支断端瘻の危険因子の単変量解析では、術前感染（ $p=0.0002$ ）、右肺切除術（ $p=0.0043$ ）、2群、3群リンパ節転移（ $p=0.0387$ ）が危険因子であった。ロジスティック回帰分析でも、術前感染、右肺切除術、2群、3群リンパ節転移が危険因子であった。これら危険因子を有する症例では、感染のコントロールや縦隔リンパ節郭清に際して気管支動脈の温存の配慮、気管支断端の被覆を行い気管支断端への血流維持が重要であると考えた。

## Video-Assisted Breast Surgery: Reconstruction after Resection of More than 33% of the Breast

(J Nippon Med Sch 2006; 73: 320-327)

鏡視下乳腺手術：33%以上乳腺切除後の乳房再建

山下浩二<sup>1,2</sup> 清水一雄<sup>2</sup>

<sup>1</sup>日本医科大学武蔵小杉病院外科・心臓血管外科

<sup>2</sup>日本医科大学外科学（内分泌・心臓血管・呼吸器部門）

背景：乳房再建法の進歩により、乳房温存術で整容性を損なわず、より多くの乳腺切除が可能となった。われわれは、同時乳房再建併用広範囲乳腺切除症例の整容性を報告する。

方法：乳房温存術は鏡視下乳腺手術（VABS）で、乳房再建は同時に次の3法で行った。温存乳腺の授動、側胸部脂肪織の移植、吸収性繊維網の充填法。整容性評価は、5項目4段階法ABNSWで行った。

結果：2001年12月～2006年3月に130例の乳癌症例にVABSを行った。対象は33%以上乳腺切除の29例で、DCIS1例、多発癌6例、広範囲進展20例、術前化学療法後2例。乳腺切除33%～50%21人、50%以上8人。永久標本で切離断端は全て陰性。術後整容性は良好。最大33月、平均19月追跡で、局所再発なし。

結語：VABSと共に新考案された乳房再建法は、乳腺切除量を著明に拡大でき、良好な整容性を保ち、正確な断端陰性を確保し、乳房温存療法の適応を拡大できる。